

跡見花蹊画 「秋草図屏風」修復される。

「秋草図屏風」跡見花蹊画
六曲一隻 絹本金地着色 縦一七二cm×横三八四cm
制作年・明治三十八（一九〇五）年 花蹊記念資料館蔵



六曲一隻の大画面には、萩、薄、桔梗、撫子、女郎花、藤袴、芙蓉、鶏頭、秋海棠、あざみ、野菊などの秋草を配置して、動きのある空間を創り出している。花蹊六十六歳の時に描かれた「秋草図屏風」は、名実ともに女史の代表作である。

特別予算をいただき、今年度四月から始まった跡見花蹊の大作「秋草図屏風」の修復が九月末に完了した。花蹊記念資料館収蔵以前の保存環境が悪く、カビと思われるものが画面を侵食していた。文化財を手掛ける修復業者に依頼。事前調査としてデジタル撮影（可視光・赤外）、顕微鏡撮影、蛍光X線分析（東京芸術大学文化財保存学協力）を行った。

調査でわかったことは、
①過去に高湿度環境などに長時間置かれたことにより、本紙全体にカビによる被害があった形跡があり、画面全体に円状の痕跡また蝶番付近には連続性のあるシミの痕跡も確認できた。

②カビ等の被害により金箔の下にある料絹が黒色化している箇所があった。
③金箔が押された料絹の見た目が変化したので、その黒さなどを隠す目的で上から金泥を塗り重ねた箇所があり、また加筆箇所もあった。

④塗り重ねた金泥の種類が複数確認でき、青味がかかった金筆跡のある金、黒く変色した金等、なかには濡れた筆で軽く拭うだけで取れてしまう不

安定な状態の金泥があった。

⑤塗り重ねられた金色に、銅と亜鉛の合金である真鍮泥が使われたため、時間の経過とともに、真鍮泥に含まれる銅の成分が酸化し緑青に変化した。これらにより、過去数回に渡って修復が行われ、変色を覆い隠すように金泥もしくは真鍮泥が塗られたことが判明した。

真鍮泥は銅と亜鉛の合金で、酸素や空気中に含まれる水蒸気に触れることで緑青に変化するが、塗った当初より暗くなり始めている箇所も確認された。塗り重ねられた金泥の中には濾過水を含ませた筆で表面を拭うことで除去が可能なものもあったが、全て取り去ると下に隠れている料絹の黒さが表れ、鑑賞性を損ねる可能性があったため、影響を及ぼさない範囲で除去された。絵の部分は保存状態がよく、ぐらつきのある釘穴を調整した。

修復された「秋草図屏風」は令和二年三月十二日（木）～五月三十日（土）まで新座キャンパス・花蹊記念資料館で開催される「跡見花蹊とその遺産展」でお披露目される。ご高覧いただければ幸いである。

（花蹊記念資料館）



円状のシミ痕跡



蝶番付近のシミ痕跡



黒く変色した金色



筆跡のある金色



緑青に化学変化した真鍮泥



蛍光X線分析



ドライクリーニング



上から塗られた金色の除去

【画像・情報提供：株式会社半田九清堂】